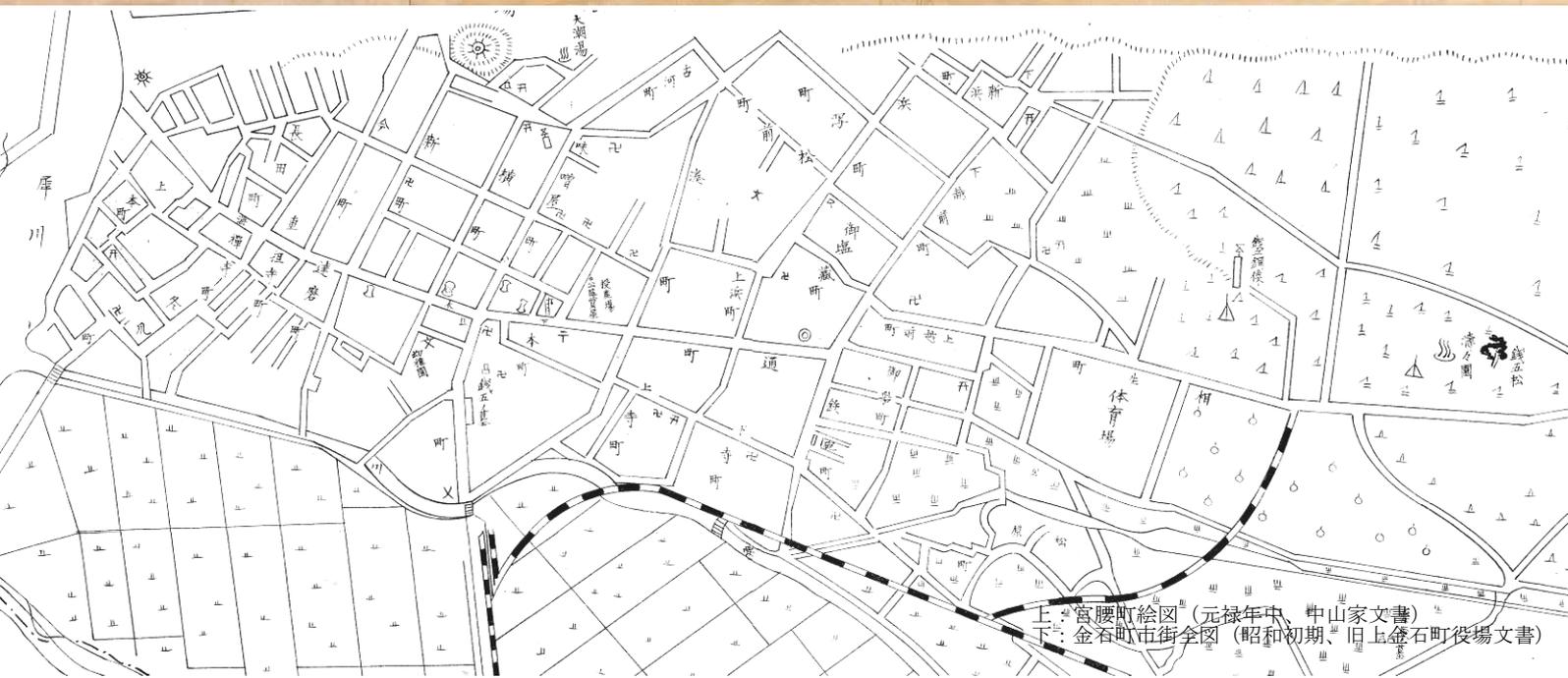


平成23年 新春展

腰宮から金石へ



上：腰宮町絵図（元禄年中、中山家文書）
下：金石町市街全図（昭和初期、旧上金石町役場文書）

平成23年 1月22日(土)～3月20日(日)

金沢市立玉川図書館 近世史料館

開催にあたって

現在の金石地域は近世まで宮腰かないわと呼ばれていました。前田氏の金沢入城を先導した中山氏の功績もあり、宮腰は金沢城下の外港として整備が進められました。以後の宮腰は城下町金沢の影響を強く受けながら発展していきました。一方で、海を通じて領外の人や物資を受け入れる窓口としての役割を担ったため、港町特有の開放的な文化が醸成され、文化面では歌舞伎女形役者の初代中村歌右衛門、経済面では海商の銭屋五兵衛のように、藩域を越えて活躍する進取の気性に富んだ人物を生み出すことになりました。

金沢の外港としての宮腰の地位は、隣村の大野村等の台頭によりしばしば脅かされていきました。船の入津をめぐる数度の争論の末、幕末の慶応2年（1866）には両者の対立の融和を目的とした合併が行われ、金石町が成立しました。

こうした宮腰（金石）地域に関する歴史資料として、中山家文書（個人蔵）、加越能文庫（当館所蔵）、酒屋家文書（石川県立図書館所蔵）などが知られています。また、先般の金沢市史編さん事業に伴い、喜楽彦三家文書、木屋藤右衛門家文書等、大野・粟ヶ崎地域を含めた史料の発掘、再確認が行われました。このような地域の史料に対する関心の高まりの中で、今年度当館は二木文庫と旧上金石町役場文書という、ともに宮腰（金石）地域の史料の寄贈を受けました。二木文庫は、近世宮腰の町年寄等、町役人を歴任した有力町人である銭屋市郎右衛門家に伝来した文書です。旧上金石町役場文書は、明治22年（1889）に市町村制が施行されてから昭和18年（1943）に金沢市に編入されるまでの上金石町（大正9年（1920）に金石町と改称）の役場文書です。今後、両史料の活用により、当該地域の新たな史実の解明が進むものと期待されます。

本展示では、二木文庫、旧上金石町役場文書の寄贈を記念して、宮腰（金石）地域の特徴や変遷について、所蔵史料等により紹介します。



【825-18】延喜式内社大野湊神社千二百年祭行列之図
（中山家文書、個人蔵）

1. 港町 宮腰

今回寄贈を受けた二木文庫の中には、承応4年（1655）の^{おおつのぼりまい}大津登米（^{のぼせまい}為登米ともいう）に関する史料が16点含まれています。大津登米とは、加賀藩が年貢米を販売するため大津へ米を回送することを言います。この時に採られた一般的なルートは、領内から一旦宮腰に集積した後、敦賀を経て、琵琶湖経由で大津へ運ぶというものでした。この大津登米は元和2年（1616）に制度化されますが、西廻り航路を用いた大坂登米が本格化する17世紀後半以降は衰退したと言われています。今回紹介する承応4年の大津登米はその最末期の事例であり、大坂登米を同時に行いながら安定的な販売ルートを模索していた時期のもので、この事例自体は、これまで中山家文書の「二木自分留」により知られていましたが、その原史料が一括して見つかったことにより、藩の御用を請け負った銭屋（二木）助左衛門が敦賀の蔵宿などと協力しながら大津御蔵に納めるまでの過程を具体的に知ることができます。

ここでは二木文庫の大津登米に関する史料と併せて、藩米回送に関する所蔵史料を展示します。また、宮腰町内に設けられた重臣たちの囲屋敷に関する史料や漁業に関する史料を展示し、宮腰の港町としての特徴を明らかにしていきます。



【37.2-12】大津登米に付御印書等仕立文書（二木文庫）

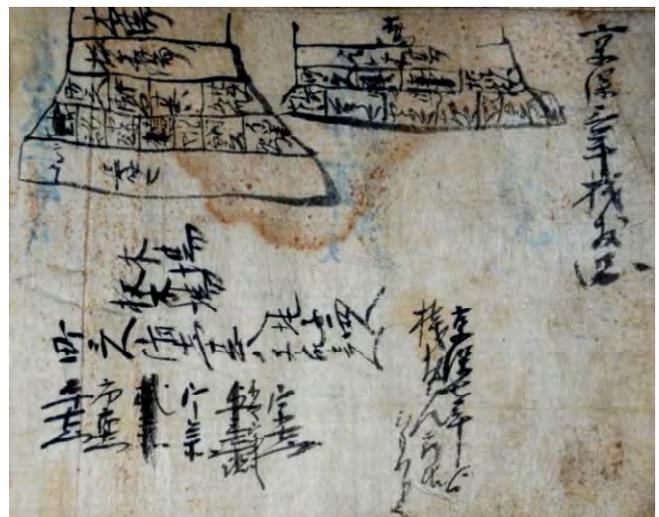
2. 大野湊神社と宮腰

大野湊神社と宮腰は、その成り立ちにおいて密接な関係を持ち、近世でもお互いを支えあう関係が築かれていました。

現在、金沢市寺中町に位置する大野湊神社は、その社名からもうかがえるように、かつては犀川の河口付近（古代の大野湊）に祀られた神社でした。しかし、神社の縁起によれば、建長年中の火災（高波による浸食という説もある）により、現在地に遷座しました。一方、宮腰の地名は「宮」の「腰」、すなわち大野湊神社の麓に広がることから起こったという伝承があります（『温故集録』・『加賀志徴』）。

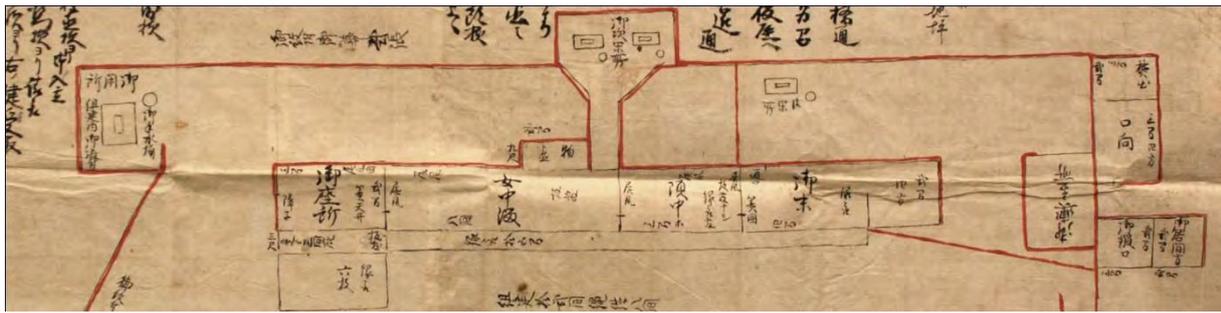
近世の大野湊神社は佐那武大明神、佐

那武社などと呼称され、天正14年（1586）には前田利家から田地2町と氏子15ヶ村の寄進を受けており、その中で「宮腰村」は筆頭に挙げられました。また、慶長9年（1604）には関ヶ原合戦の勝利の報賽として、前田利長の命により諸橋大夫による神事能が始められました。当初は前田家の手厚い保護のもとで神事能が行われていましたが、寛文元年（1661）以降は宮腰湊の繁昌を理由に、次第に宮腰等の氏子の負担による部分が大きくなっていきました。近世中期には経営難により中絶の危機に陥りますが、藩、神主、宮腰町人の尽力により打開策が講じられ、現在に至るまで受け継がれています。



宮腰町人の神事能枚数図（銭屋〔二木〕市郎右衛門の名も見える）
【930-1】年々寺中御能番組、中山家文書、個人蔵

3. 遊参の場 宮腰



【37.4-5】 栄操院様等宮腰浜御出之節御仮屋絵図（二木文庫）

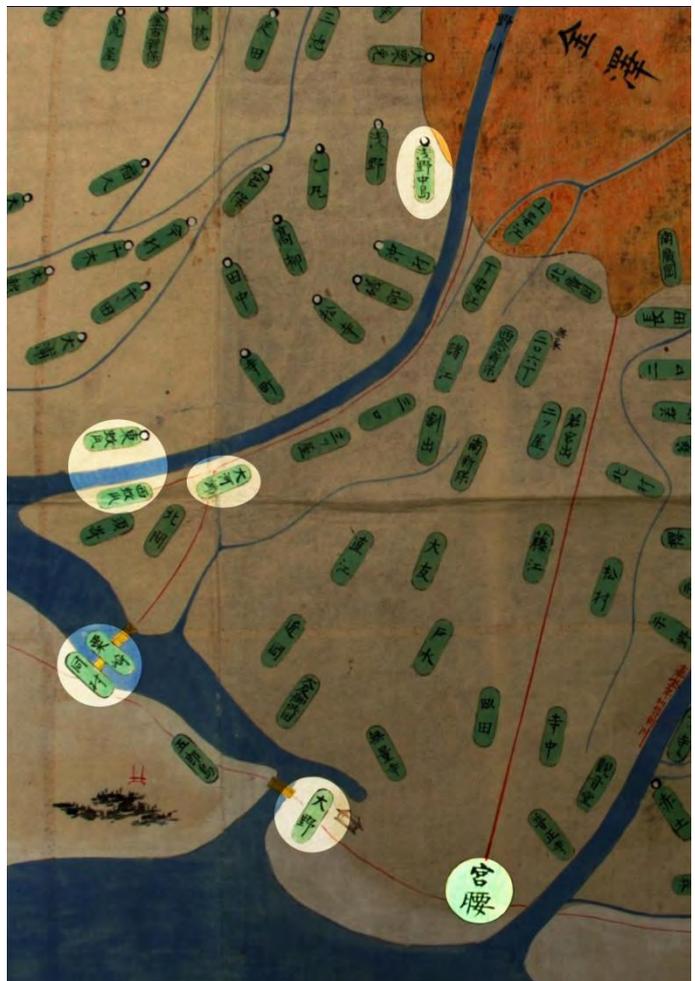
宮腰の郊外には御舟小屋という藩主の御召船の収納施設があり、宮腰町奉行のもとで御船手足軽と呼ばれる人たちが管理や訓練を行っていました。前田家の藩主やその子弟は「行歩」と称して、御舟小屋や浜へ出かけることがありました。今回寄贈を受けた二木文庫の中には、藩主家が宮腰浜に「御出」になった際に設けた「御仮屋」に関する史料が10点残されています。例えば、嘉永3年（1850）3月24日に栄操院（前田斉広側室）と豊之丞（前田利行、前田斉泰5男、大聖寺藩13代藩主）が宮腰浜へ「御出」になった時は、七ツ屋往還から粟ヶ崎橋を通過して粟ヶ崎の御旅屋に入り、それから宮腰浜に建てられた「御仮屋」に入り、地藏道から宮腰往還を通過して金沢城に戻ったと記されています。わずか一日の出行ながら、御仮屋を建てる費用や警護する人々の宿所の手配等、その負担は少なくありませんでした。

宮腰へ遊歩に訪れたのは藩主家だけではなく、加賀藩士やその家族も行楽に出かけていました。文久2年（1862）4月15日に中村豫卿（明組与力、100石）の家族は当主を残して佐那武社の神事能に併せて宮腰へ出かけており、弘化3年（1846）9月1日に成瀬正居（人持組2,500石）は父と一緒に御舟小屋辺へ釣りに出かけています。

とりわけ宮腰に人が集まったのは6月15日の名越神事の時でした。名越神事とは茅の輪潜り（ちのわくぐり）で有名な厄除けの行事ですが、宮腰においては佐那武社の神輿が宮腰浜へ遷座した後、築山を従えて町内を練り歩く夏の祭礼で、今日の「金石祭り」の前身となるものです。この名越神事に併せて、宮腰浜で芝居が行われることもあり、金沢からも見物客が多数訪れました。群集を警戒した藩は警固足軽を出役させ取締りを命じたことが判っています。

4. 金石町の成立

近世初頭以来、宮腰は船の入津をめぐる隣村の大野村・粟ヶ崎村としばしば争論を繰り広げました。その原因は、宮腰の陸運に対し、大野側に入津したほうが舟運を通じて直に金沢城下へ物資を運搬できる利便性あったため、次第に宮腰への入津が減少したことにありました。このことは宮腰の馬借の生計を圧迫しました。先に紹介した宮腰浜での芝居興行



【大1082】 石川河北両御郡御鷹場絵図（大友文庫）
3（○囲みは物資の輸送をめぐる利害関係のある村々）

は、困窮する馬借たちの生活補填の意味合いもありました。また、二木文庫の中には馬借たちの宮腰役用銀からの借用証文も残されており、こうした運送業で生計を立てる人々の生活の困窮が争論の背景にあったと考えられます。

慶応2年(1866)に藩は宮腰町と大野村の対立を融和するため両所の合併を命じ、ここに「金石町」が成立しました。金石という地名は「交情ノ堅ヲ金石ノ交ト曰」とあるように、宮腰町と大野村の和熟を期待したものでした。また、融和を促進する事業として、両所を繋ぐ運河の開設を命じるとともに、両所を隔っていた砂山を取り除いて「相生町」という新地を作らせ、繁栄策として茶屋・物真似興行を許可しました。

明治22年(1889)に市町村制が施行され、旧宮腰地域は上金石町、旧大野地域は下金石町としてそれぞれ発足しました。しかし、上下という序列があるかのような表記や、両者の混同による不都合が生じたため、明治31年(1898)に下金石町は大野町の旧名に復し、上金石町も大正9年(1920)に金石町と改称しました。

5. 濤々園と金石町

濤々園は、金石電気鉄道が浅野川電鉄の粟崎遊園に対抗して大正14年(1925)に開設した娯楽施設です。しかし、その娯楽の内容や経営の実態などについてまとまった史料がなく、また金石町が濤々園に対してどのような関与をしていたのかもよく判っていませんでした。

今回寄贈を受けた旧上金石町役場文書の中には、「金石バス計画配置図」等、濤々園の計画段階の見取り図のほか、「温浴場設置関係書類」という、後の濤々園になる施設の設置認可申請書類が残されていました。これにより、娯楽施設の設置に際し、金石町が保安林(砂防林)の解除申請を農林大臣あてに行ったこと、その申請の中で娯楽施設の設置を町による社会政策の一環として位置付けていたことなどが判りました。今回の展示ではこれらの史料に加え、濤々園ができる前の砂防林の植林や砂害の状況などが判る史料も紹介します。



【特 36.14-2】金石バス計画配置図
(旧上金石町役場文書)

計画段階の見取り図のほか、「温浴場設置関係書類」という、後の濤々園になる施設の設置認可申請書類が残されていました。これにより、娯楽施設の設置に際し、金石町が保安林(砂防林)の解除申請を農林大臣あてに行ったこと、その申請の中で娯楽施設の設置を町による社会政策の一環として位置付けていたことなどが判りました。今回の展示ではこれらの史料に加え、濤々園ができる前の砂防林の植林や砂害の状況などが判る史料も紹介します。

参考文献

- 中崎善治郎『金石町誌』(石川県石川郡金石町役場、1941年)
- 水上一久「藩政初期における加賀宮腰港について」(『金沢大学法文学部論集 哲学史学篇』8、1960年)
- 『石川県史資料 近代篇2』(石川県、1975年)
- 大野町史編集委員会編『金沢市大野町史』(北国新聞社、1976年)
- 田中喜男『加賀藩における都市の研究』(文一総合出版、1978年)
- 金沢市立図書館編『旧宮腰町々年寄役 中山家文書目録』(金沢市立図書館、1985年)
- 金沢市立図書館編『金沢市寺中町大野湊神社文書目録』(金沢市立図書館、1987年)
- 金沢市立玉川図書館近世史料館編『温故集録 一』(金沢市立玉川図書館近世史料館、2003年)
- 金沢市立玉川図書館近世史料館編『宮本文庫目録』(金沢市立玉川図書館近世史料館、2008年)
- 田中喜男校訂『湊町役人勤方史料』(高科書店、1988年)
- 見瀬和雄『幕藩制市場と藩財政』(巖南堂書店、1998年)
- 金沢市史編さん委員会編『金沢市史 資料編8 近世六 湊町と海運』(金沢市、1997年)
- 長山直治「加賀藩登米における陸廻り力の派遣と難船処理」(『加能史料研究』第12号、2000年)
- 金沢市史編さん委員会編『金沢市史 資料編15 学芸』(金沢市、2001年)
- 村本外志雄「金石の「日和山」」(『加越能の地名』19、2003年)
- 金沢市史編さん委員会編『金沢市史 通史編2 近世』(金沢市、2005年)
- 人見佐知子「北陸・港町遊所の形成—加賀藩金石町相生町新地を事例に」(『年報都市史研究』17、山川出版社、2010年)
- 竹松幸香翻刻・校注「『起止録』文久2年」(『金沢大学文化財学研究』第10号、2010年)
- 「成瀬正居日記」(金沢大学附属図書館ホームページ、<http://narusenikki.web.infoseek.co.jp/>)

展示史料一覧

No.	史料名	史料番号
1	大津登米に付御印書等軸仕立文書	特37.2-12
2	宮腰町奉行勤方帳	特16.62-10
3	宮腰町絵図（複製）	840-1
4	御分国船持中定書等諸留	730-1
5	旧記	特16.62-8
6	天保八年岩瀬浦より宮腰に積廻米に付岩瀬浦江出役一件	090-48
7	温故収録 卷八	特16.28-71⑧
8	前田利常判物写（社領寄進状）	特37.5-1
9	前田利常判物（佐那武明神社田地寄進状）	B2-30
10	前田利常宮腰村佐那武明神社領安堵状写	825-3
11	国事雑抄	16.28-77⑩
12	佐那武神事能由来并末社西宮臨時神事書	B3-140
13	佐那武明神社御能濫觴申上書	特37.5-2
14	寺中神事能方留帳	B3-131①
15	年々寺中御能番組	930-1
16	御出之節順路并御仮屋ヶ所図	特37.4-3
17	栄操院様等宮腰浜御出之節御仮屋絵図	特37.4-5
18	宮腰御舟小屋絵図	特16.60-111
19	日誌	特35.24-1
20	宮腰町奉行手帳	特16.62-9
21	延喜式内大野湊神社千二百年祭行列之図	825-18
22	金沢芝居番付 第一	096.0-520①
23	二木自分留	640-1
24	宮腰粟崎出入一卷	特16.79-1
25	大野湊入津等宮腰ヨリ指構申二付同所町御奉行并御郡所ヨリ御達之紙面及落着御書立之写	特33.9-1
26	石川河北両御郡御鷹場絵図	大1082
27	浅の川曳荷物（鉄）宮腰馬借等指留二付御詮儀願	特33.9-3
28	馬借中御役用銀借用証文	特37.3-3
29	鈔録合集	特16.28-98(52)
30	金石町旧記 二	特16.62-52②
31	喜楽彦三家文書	特34.21-29
32	町法改廢書類	特36.01-06
33	金石町治一覽	特36.10-81
34	石川郡金石本町地内字歌場開墾地見取図	特33.2-139
35	船小屋跡地代金 十二年作徳米渡二付添状	特33.2-143
36	海岸砂防林経営大要	特36.9-7
37	温浴場設置関係書類	特36.14-1
38	金石バス計画配置図	特36.14-2
39	濤々園入場券半券・優待券	090-1053-83・84
40	マッチラベル	090-1055-773～776

掲載史料と展示史料は一致しないことがあります。